

顕彰状

山田太一氏は、1934年6月6日に東京都浅草で生まれた。1944年、9歳のとき、防空法指定区域の建築物取り壊しにより、強制疎開で神奈川県湯河原町に転居。神奈川県立小田原高校を卒業後、1954年に早稲田大学教育学部国語国文学科に入学、1958年に卒業した後、松竹大船撮影所演出部に勤務し、主に木下恵介監督の助監督を務め、脚本の仕事にも関わるようになった。1964年、映画産業斜陽の中、テレビ業界に打って出た木下氏とともに松竹を辞め、フリーの放送作家となった。

以来、氏は日本の放送界を代表する脚本家として長年にわたって活躍し続けてきた。氏のドラマが人びとの記憶に残ったのは、テレビ界の主流の視聴率中心主義的なドラマとは一線を画し、視聴者の心を強く揺さぶるような内容を盛り込んできたからである。とりわけ、鶴田浩二氏の演じる特攻隊の生き残りの主人公が、若者たちに「お前たちは本当に生きているか」と強く問いかける『男たちの旅路』（1975年）、東京郊外の中流家庭の表面的な幸福さの裏側にある悩みや寂しさを抉りだしてホームドラマの幸福像を覆した『岸辺のアルバム』（1977年）、学歴や容姿をめぐる劣等感を抱えた若者たちの等身大の人生を描いた『ふぞろいの林檎たち』（1983年）などは、名作として今日まで語り継がれている。

氏の優れたテレビドラマ作品は、文化庁芸術祭大賞、ギャラクシー賞大賞、日本民間放送連盟賞最優秀賞、放送文化基金賞最優秀賞、東京ドラマアワードグランプリなどを次々と受賞し、また個人としてもNHK放送文化賞、芸術選奨文部大臣賞、テレビ大賞優秀個人賞、向田邦子賞、放送人グランプリ、毎日芸術賞、朝日賞など、放送界で受賞し得るほとんどの賞を受賞してきた。

氏のこうした活躍は、ドラマ作品として優れていたというだけでなく、同時代の向田邦子氏、倉本聰氏らの作品とともに、それまで低い地位しか与えられていなかったテレビドラマの脚本家の仕事に人びとの目を向けさせ、脚本家の社会的地位を向上させるために大きな役割を果たした。氏のドラマ作品が、現在活躍している、後続の脚本家たちに与えた影響の大きさもまた計り知れないものがある。

また1980年代からはテレビドラマだけでなく、小説や戯曲にも活躍の場を広げ、小説『異人たちとの夏』で山本周五郎賞を受賞し、エッセイ集『月日の残像』で小林秀雄賞を受賞するなどあらゆる領域で高い評価を得ている。また近年も筆力は衰えることなく、東日本大震災の問題を正面から描いたテレビドラマ『時は立ちどまらない』（2014年）が人びとを深く感動させ、放送文化基金賞最優秀賞など数々の賞を受賞したことは記憶に新しい。

以上のように日本のテレビドラマ史は、氏の功績抜きには語れないといっても過言ではなく、早稲田大学はここに山田太一氏の顕著な功績をたたえ、早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2016年9月24日

早稲田大学